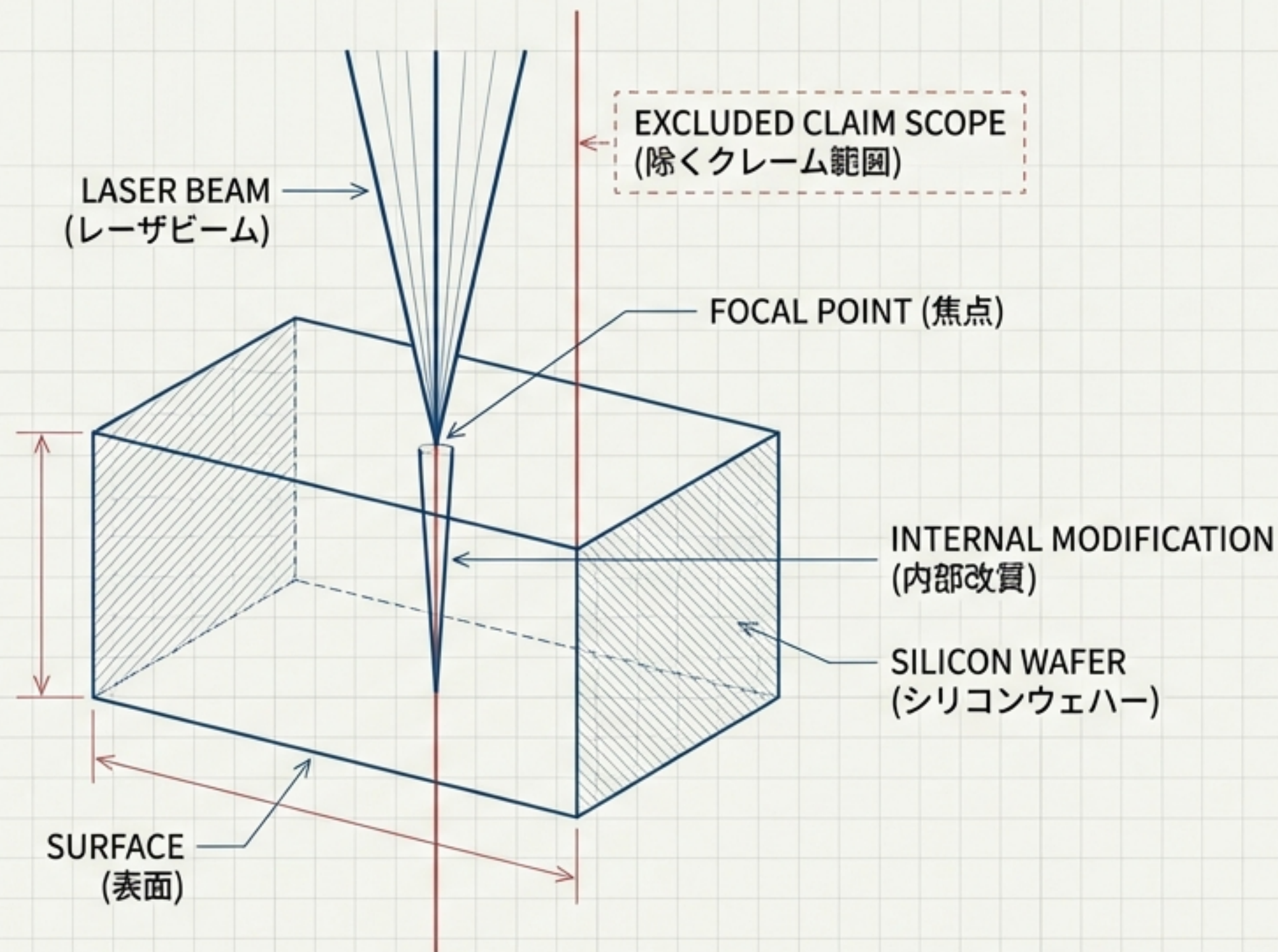


「レーザ加工装置」事件の懸念は審査基準改定で解消されたか

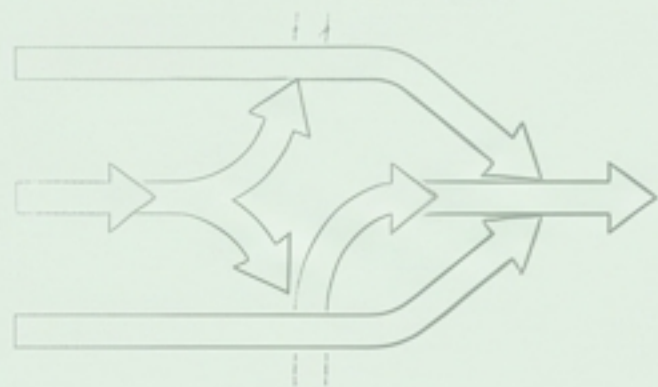
「除くクレーム」を巡る論点と第18回審査基準専門委員会WG決定事項の対照検証



結論：進歩性判断の論理は適正化されるが、構造的な課題は残る

Scorecard

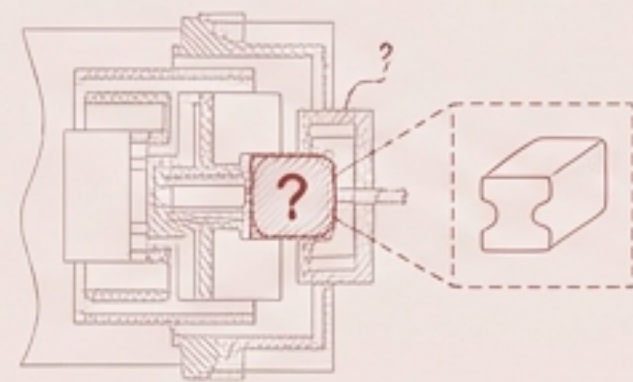
論点：阻害要因の
認定論理



解消

「必須構成の除外＝阻害要因」という安易な論理は否定された。審査基準は「ブログ著者」の主張する論理と整合する方向へ改定。

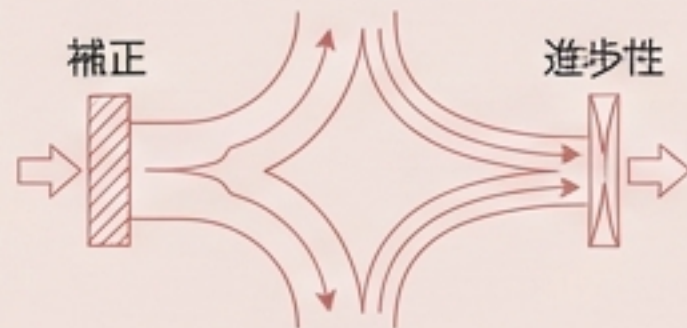
論点：用途限定
(加工対象物)の解釈



未解消

基準本文の改訂なし。用途限定が「装置の構造」を特定するか否かは、引き続き個別の事例・訴訟での解釈に委ねられる。

論点：制度設計
(補正の自由度)



未解消

欧州流の厳格な補正制限（方向性①）は見送り。日本独自の「入り（補正）緩く、出口（進歩性）厳しく」の構造が維持された。

論争の発端：「レーザ加工装置」事件と「そーとく日記」の提言



【事件】知財高判 令和3(行ケ)10111

- **対象**：特許3935188（浜松ホトニクス）
- **争点**：引用発明（甲11）で必須だった「溝」をあえて除外（除くクレーム）。「溝」で進濟性とめ歩性を肯定。
- **判決**：「引用発明の必須構成を除くことは、それ自体が阻害要因（Block Factor）である」として進歩性を肯定。



【批判と改定】そーとく日記の提言・特許庁の対応

- **批判**：「引用発明の課題解決手段に当業者は拘束されない」。単なる構成の削除は通常の設計変更であり、阻害要因の認定には「**特段の理由**」が必要。
- **動向**：2025年11月、特許庁WGが審査基準改定を了承。批判の論理を取り入れ、阻害要因の認定を厳格化する方向へ。



本検証における3つの論点（三層構造）

【第一層】 進歩性の論理 (Logic)

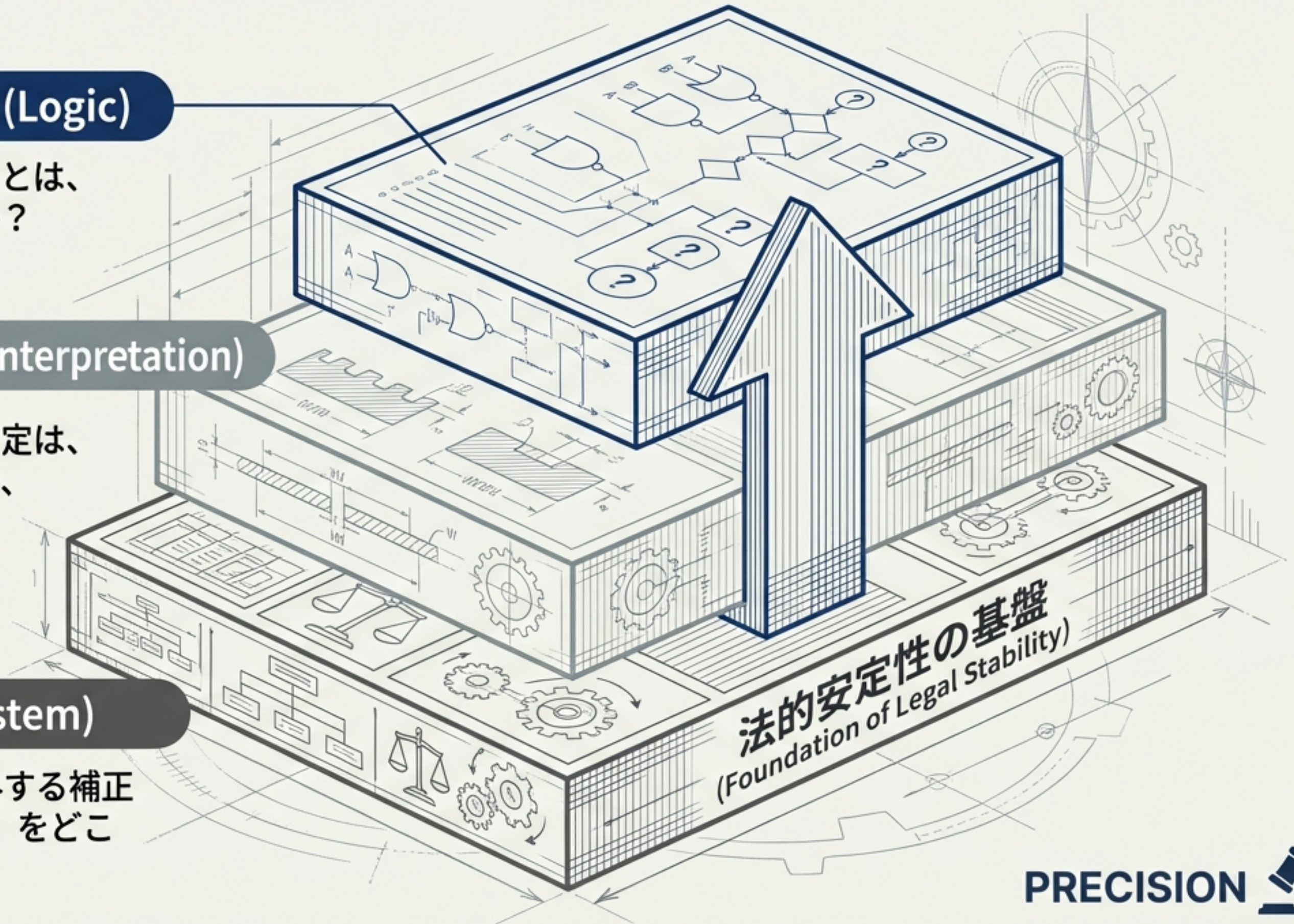
引用発明の構成を除外することは、
直ちに「阻害要因」になるか？

【第二層】 クレーム解釈 (Interpretation)

「溝のないウェハ」という限定は、
装置の構造を特定しているか、
単なる用途限定か？

【第三層】 制度設計 (System)

当初明細書にない事項を除外する補正
(Undisclosed Disclaimer) をどこ
まで許容すべきか？



【第一層】 阻害要因の認定論理：安易な認定は排除へ



従来の懸念 (The Old View)

「引用発明で必須 = 阻害要因」

- 引用発明の文脈（課題）を重視しすぎるあまり、構成の削除を自動的に「阻害」と見なす傾向。



改定後の基準 (The New Standard)

「単なる除外 ≠ 阻害要因」

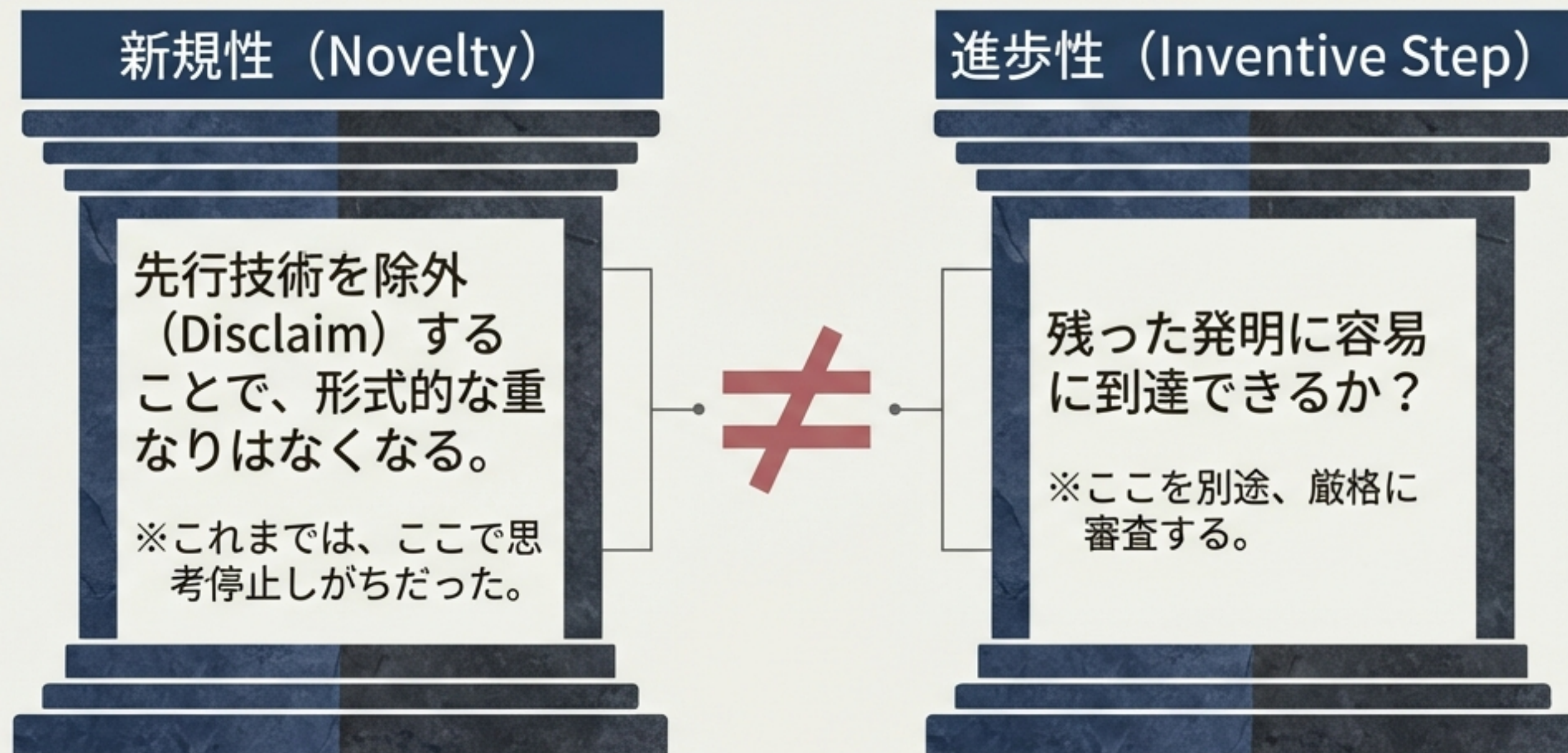
- 当業者は引用発明の課題に拘束されない。通常的设计変更の範囲内。
- 「強い阻害要因（技術的困難性・失敗の教示）」がない限り、设计変更の動機づけが優越し、進歩性は否定される。

判定：解消（ブログ著者の主張と合致）

PRECISION



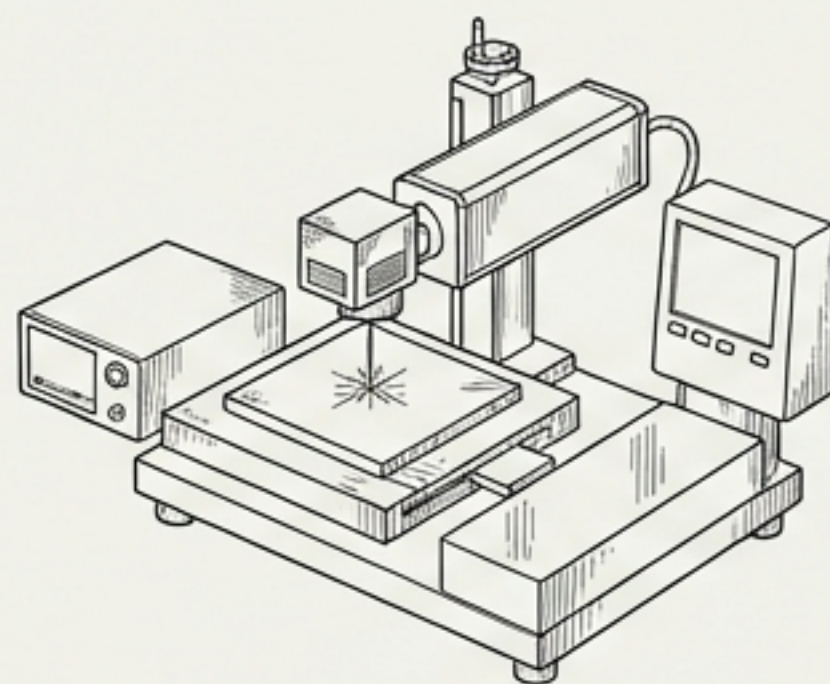
新規性と進歩性の「論理的ギャップ (The Logical Gap)」の明文化



審査基準改定により、「除くクレームで新規性を確保しても、残存部分の容易想到性は否定されない」ことが明確化された。

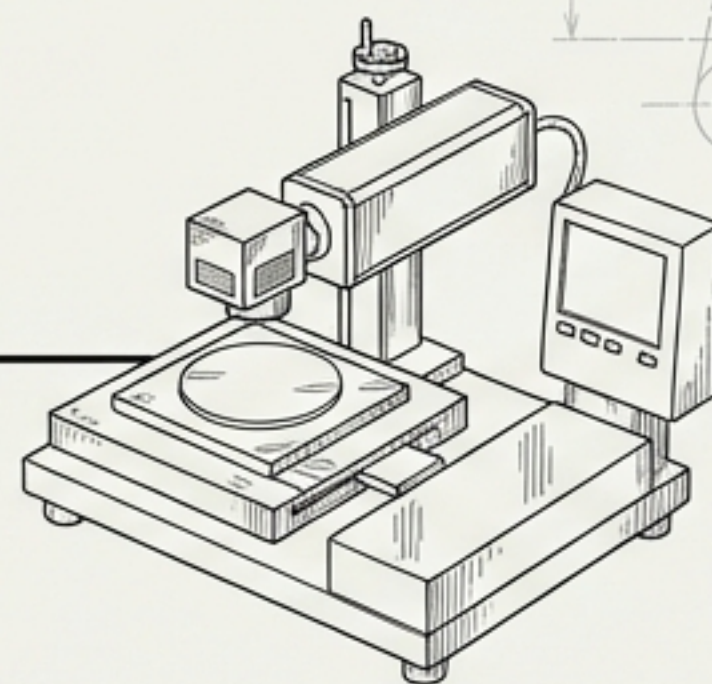


【第二層】用途限定の解釈：基準改定の射程外



Standard Laser Machine
通常のレーザー加工装置

Machine hardware
is identical
装置の構造は同一



Laser Machine processing a smooth wafer
溝のないウェハを加工するレーザー加工装置

論点：「溝のないウェハ」を切断する装置は、通常の装置と構造上の差異があるか？

✕ ブログ著者の指摘

構造上の差異はない。「用途限定」が装置の構成として評価されている点に矛盾がある。

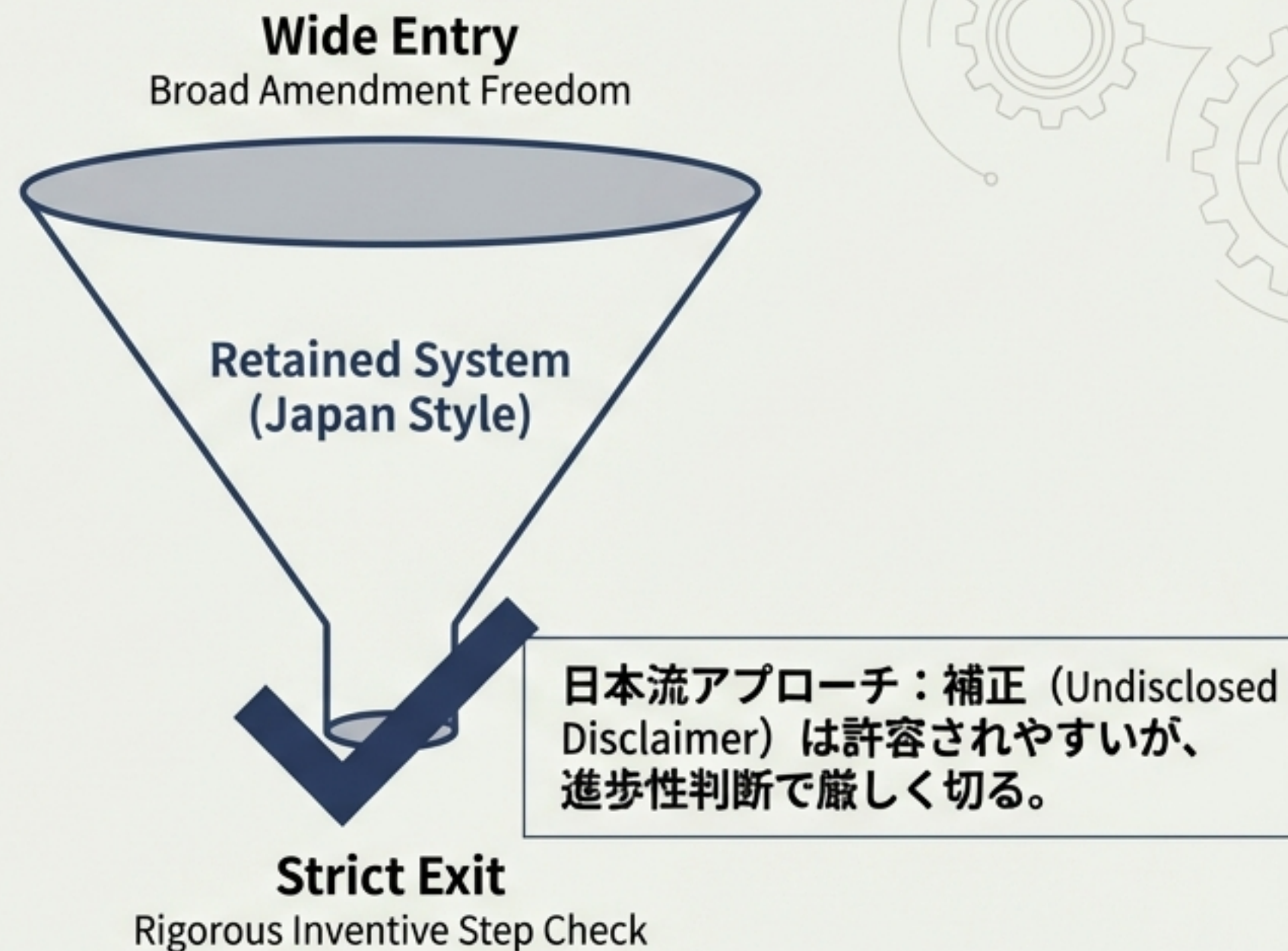
✓ 知財高裁の判断

「加工対象物の限定も、装置の構造・機能を特定する」と解釈（現状維持）。

WGの結果：明確性要件（36条6項2号）の基準本文改訂は見送り。ハンドブックへの事例追加にとどまる。解釈は個別の事例・訴訟に委ねられる（未解消）。



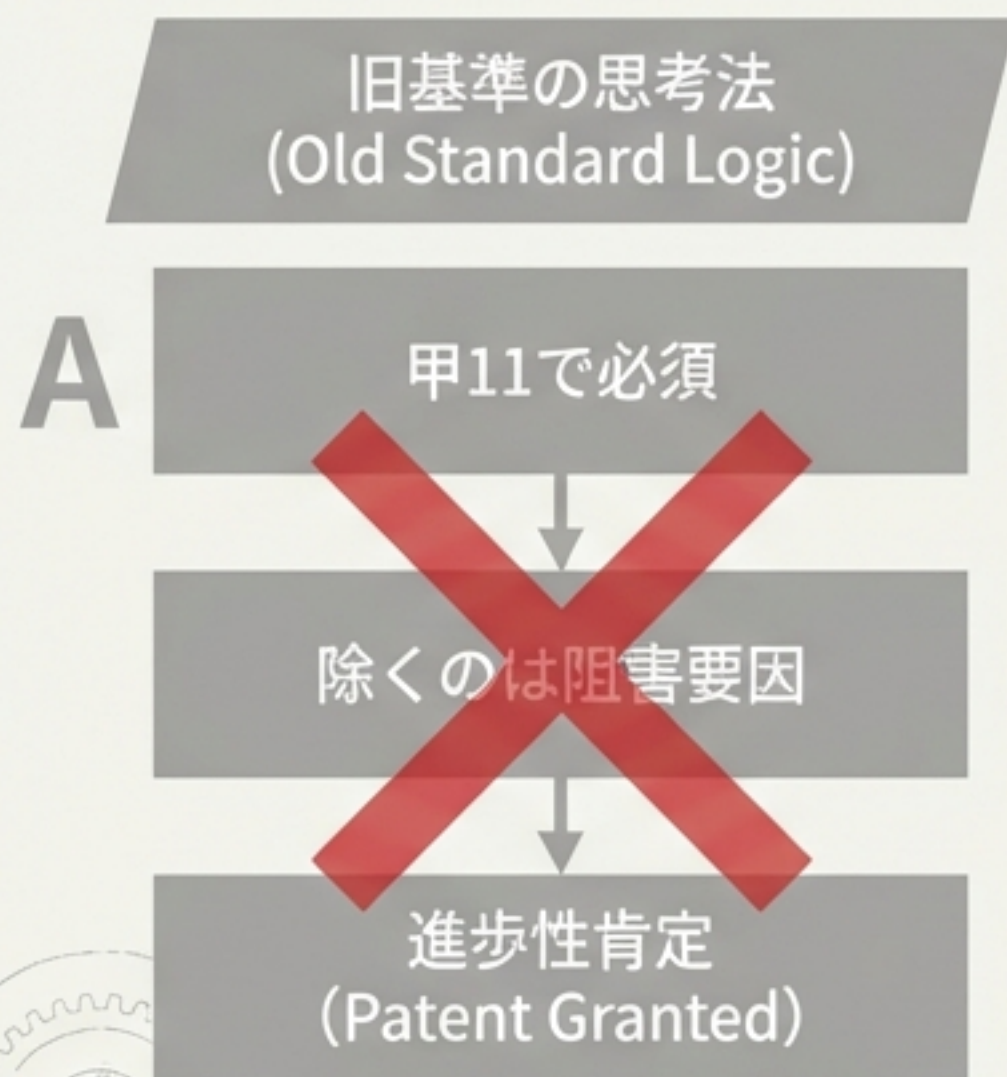
【第三層】 制度設計：日本独自の「入り口緩く、出口厳しく」



「とりあえず除いてみて、進歩性は後で考える」という
パズル的な試行的補正は、制度上依然として可能である。

シミュレーション：新基準下で「レーザ加工装置」事件はどう判断されるか？

前提：引用文献（甲11）には「溝」がある。請求項では「溝」を除いた。

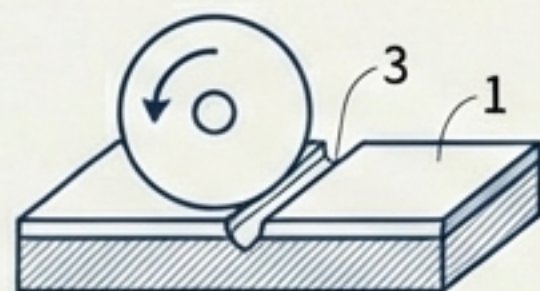


では、特許は
否定されるのか？



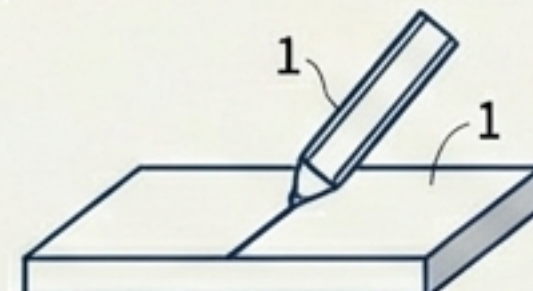
論理の遊戯から、技術的実態の立証へ 新基準下での勝敗を分けるのは「当時の技術常識」

2002 (Priority Date)



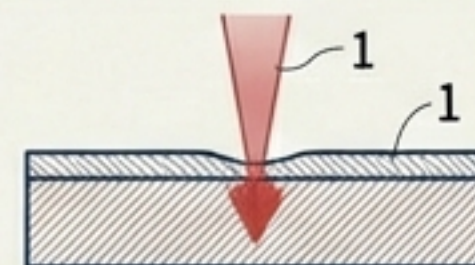
Blade Dicing

常識：物理的溝が必須
(Grooves Mandatory)



Scribing

想定外：表面無加工での切断
(Cutting without Touching)



Stealth Dicing

評価：阻害要因を認めるには、甲11の記載だけでなく、「当時の技術常識として溝なし切断が不可能・想定外だった」ことの立証が必須となる。

結論：コロンブスの卵的発明（パラダイムシフト）であれば、新基準下でも特許は維持される。
ただし、その根拠は「引用文献の記載」ではなく「技術水準の実証」に基づく。



実務への示唆（出願人側）：これからの「除くクレーム」戦略



「必須構成」論からの脱却

「引用例で必須だから」という主張は通用しない。



技術的困難性の立証

除外した後の構成が、当時の技術水準でいかに困難であったか、または異質な効果を奏するかを具体的に主張する。



正面突破の推奨

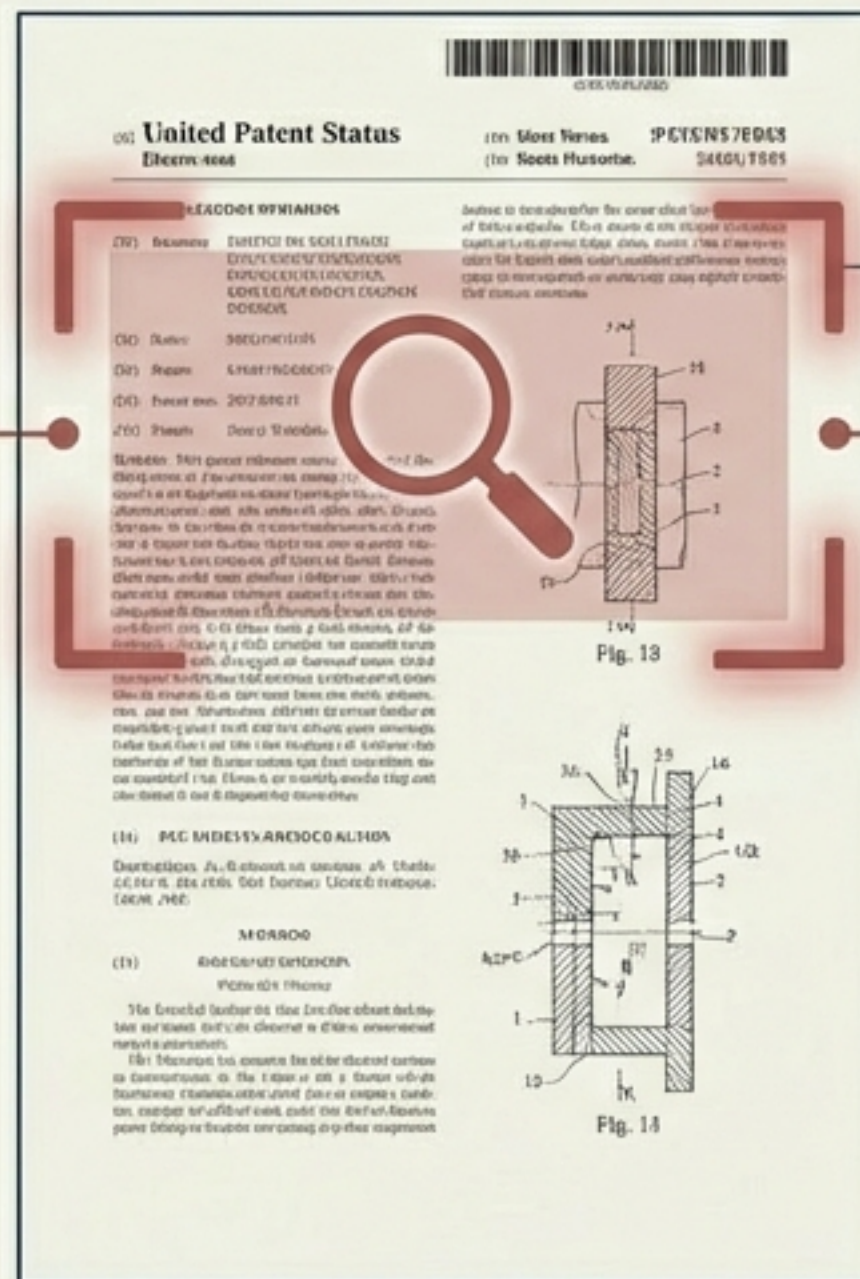
小手先の「除く」補正に頼らず、本質的な技術的思想（例：内部改質のみによる切断方法）を方法発明としてクレーム化する。



実務への示唆（第三者側）：無効審判における新たな武器

「単なる設計変更」の主張：

除くクレームで成立した特許
に対し、「除外後の発明は設
計事項に過ぎない」という
論理での無効主張が認められ
やすくなる。

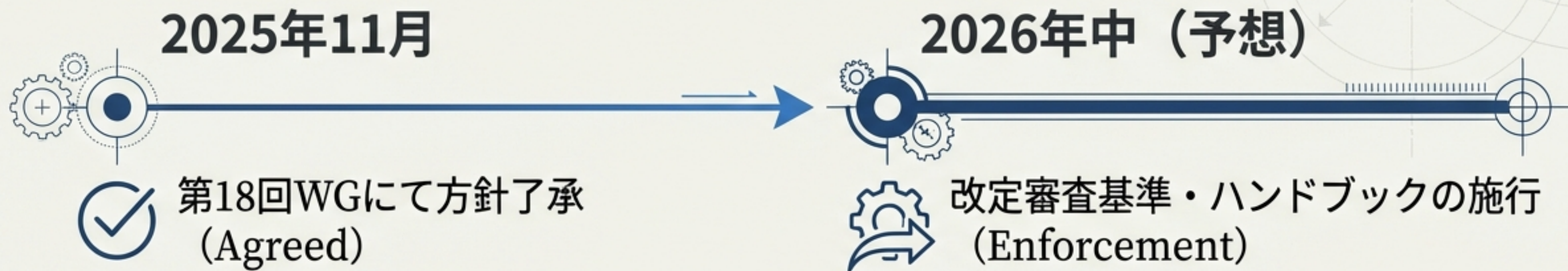


審査基準の遡及的活用：

基準改定の施行前であっても、
WGで示された「論理」は裁判
所において説得力を持つ。無
効理由の補強材料として積極的
に引用すべきである。



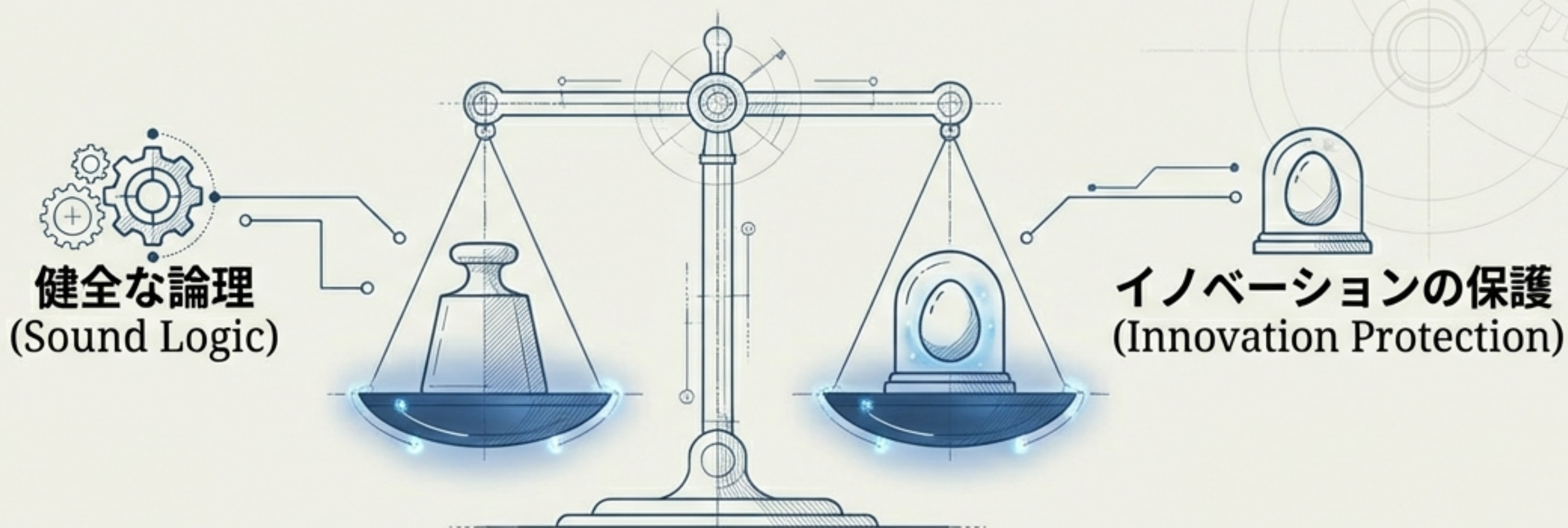
今後の展望と施行スケジュール



司法への波及：

審査基準は裁判所を拘束しないが、技術的妥当性の高い新論理は、施行を待たずして判決のロジックに影響を与える可能性が高い。実務家は直ちに対応を開始すべきである。

まとめ：論理は健全化したが、「コロンブスの卵」的発明の保護は続く



- 健全化：「引用例の構成を除けば特許になる」という安易な抜け道は塞がれた。

- 保護の継続：真に独創的な発明であれば、新基準の厳格な審査もクリアできる。重要なのは「形式的な除外」ではなく「実質的な技術的貢献」である。

